

ぶんどたかだ 文化財ライブラリー vol.4

豊後高田の 仏像十選



豊後高田市教育委員会

はじめに ～奥深い!“魅惑”の仏像の世界～

仏像とは、仏教における象徴や礼拝対象の諸尊像を指します。仏教は紀元前5世紀～4世紀頃に北インドの王子様であるゴータマ・シッダールタ（釈迦^{しゃか}）が始めた宗教ですが、仏像がつくられるようになるのは1世紀末頃とされています。インドから中国、朝鮮半島を経由して日本に仏教と仏像が伝わるのが6世紀中頃、飛鳥時代のことでした。以後、仏教は日本の社会や文化に大きな影響を与えるとともに、各時代の信仰や流行などを反映して、様々な姿形の仏像が数多く造られました。

■仏像の4つのグループ

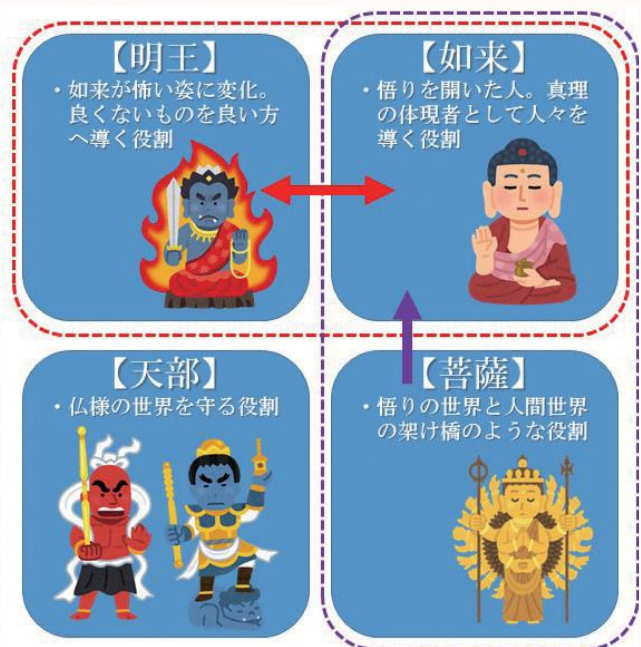
様々な種類の仏像は、その役割に応じて4つのグループに大別されます。それぞれに決まった髪形や服装をしているので、その特徴や意味を知って鑑賞すると、より深く仏像の世界を楽しむ事ができます。

○如来^{にょらい} 例)釈迦如来、阿弥陀如来、薬師如来など

如来は修行を終えて「悟り」を開いた者のことで、仏の世界の最高位にいとされています。悟りを開いた頃の釈迦の姿がモデルとなっており、コブのように盛り上がった頭頂部（肉髻^{にくけい}）、1本1本がくるくると丸まった髪（螺髪^{らぼう}）、額の真ん中の白い毛（白毫^{びやくごう}）など32個もの身体的特徴があるとされています。着衣は^{のうえ}衲衣という布1枚をまとっただけで、装飾品などは身に着けていません。

○菩薩^{ぼさつ} 例)観音菩薩、地藏菩薩など

菩薩は悟りを開くために修行中の身分。将来は如来になることを目指しているので、両者には明確な上下関係があると言えます。菩薩の姿は悟りを開く前の釈迦がモ



仏像世界の4つのグループ

デルとされており、古代インドの王族・貴族の格好をしています。したがって、冠や首飾りなどの豪華な装飾品（瓔珞）を身に着けています。長く伸ばした髪を頭上で結い上げ（宝髻）、下半身は巻きスカート（裙・裳）をはき、上半身は軽やかな衣（条帛や天衣）をまといまいます。但し、地藏菩薩だけは頭を丸めたお坊さんの格好をしています。

○明王 例)不動明王、大威徳明王など

如来の教えに従わない人々に、強い怒りをもって救いの道を教えるために姿を変えたものが明王です。密教から生まれた仏で、大日如来の化身ともされています。逆立った髪（焰髪）や怒った表情（忿怒相）が特徴で、多くが炎を背負う（火焰光背）姿で表されます。また、慈悲だけでは救えない者を導く役割があるため、様々な武器を手に持っています。不動明王の場合、右手には魔を切り裂くための三鈷剣、左手には魔物を縛り上げるとともに人々を苦しみから救うための縄（羅索）を持っています。

○天部 例)四天王、金剛力士、吉祥天など

もとのインドの神やヒンドゥー教の神が仏教に取り入れられた存在で、主として仏法を守護し、現世利益をもたらす役目を担います。天部の諸神は弁財天や吉祥天のような女性の姿の像もあれば、四天王のように甲冑を身にまとったものなど多種多様です。天部の代表格である四天王は、仏教の世界の四方を守る仏とされ、それぞれ東方を持国天、南方を増長天、西方を広目天、北方を多聞天が守護するとされています。ちなみに、四天王のうち多聞天が単独で祀られると「毘沙門天」と称されます。



木造不動明王立像(真木大堂蔵/国重要文化財)の表情(忿怒相)



木造四天王立像(真木大堂蔵/国重要文化財)のうち多聞天(北方を守護する)

■ 仏像の制作（木彫仏の場合）

○一木造

平安時代の前半に盛行した方法で、頭を含んだ像の中心部分を1本の材木から彫り出します。手足の先といった飛び出た部分は別材を継ぎ足します。木材のヒビ割れ（干割れ）防止や、像の軽量化のために背中や像底に窓を開けて中をくり抜くことがあります（内刳り）。

○寄木造

平安時代後半に完成し、発達した方法。頭を含んだ像の中心部分を2本以上の材木を組み合わせたものから彫り出します。一木造に比べて、木材の大きさに制限されずに巨像が作られる点、干割れが少ない点、分業が容易で作業期間が短縮出来る点など合理的な技法と言えます。



「一木造」と「寄木造」の構造
[画像提供:滋賀県立琵琶湖文化館]

■ ぶんごたかだの仏像

「仏の里」として知られる豊後高田では、平安時代～江戸時代にかけて数多くの仏像が造られてきました。とりわけ六郷満山文化の盛期とされる平安時代後期に造立された木彫仏が各地に所在しています。これらの多くは平安初期の一木造の伝統を受け継いだ地方色豊かな作風を示していますが、一方では富貴寺や真木大堂の諸仏のように、中央の仏師が造った寄木造からなる“都ぶり”の洗練された仏像が並存するところに大きな特色があると言えます。

今回、市内に所在する主な仏像を取り上げて解説した小冊子『豊後高田の仏像十選～ぶんごたかだ文化財ライブラリー Vol.4～』を作成しました。本冊子が仏像鑑賞の手引きとして、また、豊後高田市の歴史文化を知る一助としてご活用頂ければ幸いです。

豊後高田市教育委員会



- 凡例
- 国指定文化財 ● (Red dot)
 - 県指定文化財 ● (Blue dot)
 - 市指定文化財 ● (Brown dot)



豊後高田市の仏像十選マップ

■木造聖観音菩薩立像

本像は小田原内野区にある「内野観音堂」に所在し、元は六郷山寺院の一つである、西叡山高さいえいざんこう山寺ざんじに安置されていたと伝わっています。両腕と足先を失い、全面に焼け痕が残ることから「(内野の)焼仏やけどけ」とも呼ばれており、江戸時代初期に高山寺が焼失した際、本像は辛うじて難を逃れて現在地に到来したと言われています。像高は193cm。頭頂から足下を1本の木材かや(樞材)から彫り出した一木造で、内削りを施していません。流麗な姿から「国東のヴィーナス」とも称される本像は、大きく丸く結った髻もとどりや、引き締まった胸部、厚みのある腹部に張りのある肉感的な下半身など、平安時代前期の仏像の特徴が随所にみられます。8世紀末～9世紀頃の作と考えられ、国東半島最古の仏像と位置付けられています。

■内野観音堂木彫仏群 [市指定]

堂内には上述の聖観音立像の他、5く躯の木彫仏(木造如来形坐像・木造如来形立像・木造吉祥天立像・木造菩薩形立像①②)がまつられています。平安時代に制作されたものとみられ、いずれも内削りを施さない一木造の仏像です。経年による傷みが目立ちますが、大分県の仏教美術史または彫刻史上、特に意義のある資料として、2019年(令和元)に豊後高田市有形文化財に指定しました。



木造聖観音立像
[画像提供: 大分県立歴史博物館]



内野観音堂 堂内

もくぞう だい い とくみょうおう ぞう
木造大威徳明王像

・文化財指定
[国指定]

・位置情報
【33°30'03.3"N 131°31'03.8"E】

真木大堂に安置される平安諸仏の一つ。6つの顔と6本の手足で忿怒相に表され、大きな水牛の背に^{またが}跨っています。胸前の2本の手は中指を合わせて立て、残りの手は体側にあって武器を手にしてあります。像高241cmで、大威徳明王像としては国内最大級の大きさを誇ります。頭と体の主要部は樟材の^{くす}一木造で、背中から内削りを施して^{ふた}蓋板をはめており、手足は^{ひのき}桧の別材を^は矧ぎつけています。肉取り厚くゆったりとした量感を見せる^{たく}体軀、忿怒相の面部のおおらかな表現などに古式を示しています。年代的には11世紀前半～半ば頃の造立とみられます。大威徳明王はその姿から戦勝を祈る仏として信仰されるとともに、牛は古くから農業に使われてきたので、豊作を祈る対象にもなりました。



木造大威徳明王像

■真木大堂の平安諸仏

^{たしぶ}田染真木に所在する真木大堂は、かつて六郷山寺院の一つ馬城山伝乗寺の故地といわれ、平安時代後期に造られた9軀の仏像で知られます（いずれも国重要文化財に指定）。かつての伝乗寺は田染盆地に^{まきさん でんじょうじ}36もの末坊を有していたと伝わる大寺院で、六郷山の学僧養成の場として大変栄えていたといえます。真木大堂の平安諸仏は富貴寺大堂と並んで、中央の文化の地方伝播を示すとともに、六郷^{でんば}満山全盛期の名残を今に伝えています。



真木大堂収蔵庫内のような
右から不動明王立像・二童子像、阿弥陀如来坐像・四天王像、大威徳明王像が並ぶ。

もくぞう あみだ によらい りゅうぞう 木造阿弥陀如来立像

・文化財指定
[国指定]

・位置情報
【33°34'44.1"N 131°32'31.3"E】

本像は、かつて天念寺てんねんじの北側に位置する岩屋の一つである小両子岩屋こふたごいわやに安置されていました。1941年（昭和16）の水害で流出した天念寺諸堂再建のため、1961年（昭和36）に一時売却されましたが、1997年（平成9）豊後高田市が県の補助を受けて買い戻し、無事に“里帰り”した経緯があります。像高198cmの巨像で、両手先を除く像全体を櫃の一木から彫り出しており、後頭部と背中から大きく内削りを施しています。大粒の螺髪、上瞼まぶたを厚くして伏し目を強調した面相、Y字状に浅く彫られた衣文えもんの表現などに古様を留めています。一方で、腹部の肉付きや、薄く表現された身体の厚みは制作年代の新しさを示しており、本像は12世紀初め頃（平安時代後期）に在地仏師の手によって造られたと考えられます。現在は天念寺に隣接する「鬼会の里歴史資料館」で展示されています。また、天念寺にはこの他にも釈迦如来坐像、日光・月光菩薩立像、勢至菩薩立像、吉祥天立像の平安仏が残されており、いずれも一木造で12世紀に造られたとみられます。制作年代が集中するこの時期に天念寺は一つの画期を迎え、仏像を安置するための伽藍がらんの整備・造営が進んだことを示しています。



木造阿弥陀如来立像

■阿弥陀如来とは？

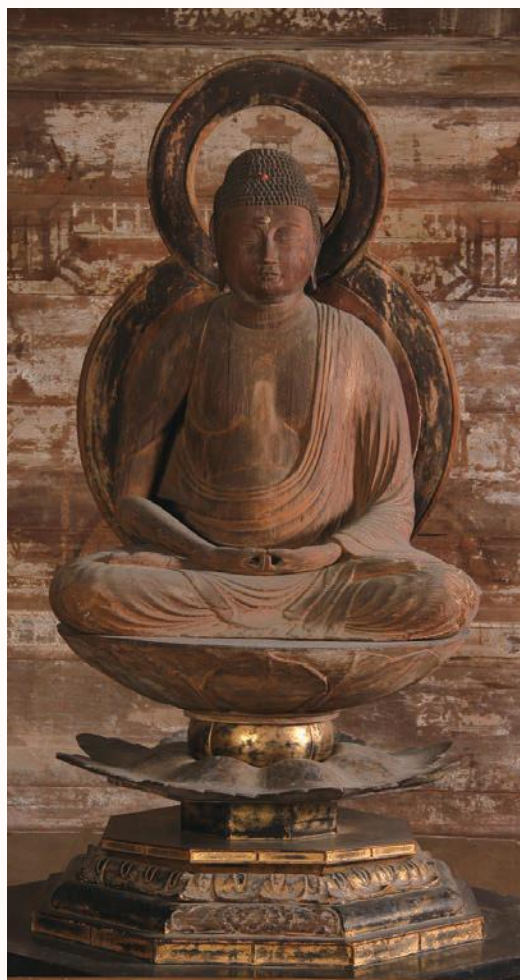
法蔵菩薩という名の菩薩が人々を救うために「四十八願」という誓いをたてて、長い間修行をした結果、悟りを開いて如来になったとされる仏。西方極楽浄土に住み、「南無阿弥陀仏」と唱えたあらゆる人々を必ず極楽浄土へ導くとされています。11世紀の政治・社会的不安を背景に「末法思想」が広まると、極楽浄土への願望が強まり、阿弥陀堂や阿弥陀如来像の造立が盛んにおこなわれるようになりました。なお、「あみだくじ」や「あみだ被り」などの言葉は、阿弥陀如来の光背に由来するとされています。

もく ぞう あ み だ に よ ら い ざ ぞう 木造阿弥陀如来坐像

・文化財指定
[国指定]

・位置情報
【33°32'16.5"N 131°31'42.6"E】

国宝・富貴寺大堂の須弥壇しゅみだんに本尊として安置されている阿弥陀如来坐像は、頭光・身光の二重円光背を背に定印じょういんを結んで蓮華座けっかふざ上に結跏趺坐けっかふざしています。像高85.7cm、榿材を用いた寄木造で、彩色はほとんど剥落し木目を露わにしています。ふくよかな丸顔、上瞼の厚い切れ長の伏し目、小ぶりに引き締まる口元などが、極楽浄土に導くとされる仏さまにふさわしい慈悲に満ちた表情を形作っています。小粒で整然と揃えられた螺髪や浅彫りの優美な衣文などに、いわゆる定朝様じょうちょうようの阿弥陀如来像の定型を忠実に受け継いでいます。12世紀半ばから後半の富貴寺大堂建立と時を同じくして造立されたものと考えられます。



木造阿弥陀如来坐像

じょういん ■定印とは？

お腹の前で手を組み、人差し指と親指で輪をつくる手の形です。「上品上生印」「弥陀定印だじょういん」とも。心を落ち着かせた無の状態（または最高の悟り）を表現しています。

じょうちょうよう ■定朝(様)とは？

平安時代中期に活躍した仏師。寄木造の完成者とも伝わっています。平安時代後期には、朝廷や藤原氏をはじめとする貴族たちの好みに合わせて穏やかな姿の仏像が流行します。これを牽引けんいんしたのが定朝で、その作風は「定朝様」として100年以上にわたって一世を風靡ふうびしました。



木造阿弥陀如来坐像の顔

眼は像の表面を直に彫って表されており(=彫眼)、切れ長で伏し目の優しい眼差しをしています。なお、鎌倉時代以降の多くの仏像では、目を本物らしく見せるために、像の内側から水晶やガラスをはめて瞳を表現する「玉眼」という技法が用いられました。

もくぞう た ろうてん および に どう じりゅうぞう
木造太郎天 及 二童子立像

・文化財指定 ・位置情報
【国指定】 【33°34'05.6"N 131°32'54.2"E】

ちょうあんじ ややま はちめんざん
長安寺は屋山（別名八面山。標高

543m）の中腹に位置し、中世までは「屋山寺」と呼ばれた六郷山の中核寺院でした。太郎天二童子像は、もとは同寺の鎮守である六所権現社（現・身濯神社）の祭神として祀られていたもので、明治時代の神仏分離で長安寺に移されました。三尊とも榿材の一木造で、いずれも両腕・足先は別材を接合しています。像高は太郎天が161cm、右脇侍（鬼形）が96.5cm、左脇侍（童子形）が97.5cmです。太郎天像は頭を美豆良に結った童子の姿で、左手には三つ葉の付いた小枝を持ち、右手は団扇状の葉形に宝珠の付いた杖を持っています。切れ長の眼に引き締まった口元の端正な顔立ちをしています。二童子のうち向かって右側は、逆立つ髪に腰巻を身に着け、目を怒らせた鬼形に表されるのに対し、左の像は太郎天と同様に美豆良を結び、あどけない笑みを浮かべており、それぞれ太郎天の脇侍として配されています。

わきじ

■脇侍とは？

仏教彫刻・絵画で、中尊（中央に位置する仏様）の左右に控える菩薩・明王・天部などをいいます。中尊を補佐する役割を持ちます。但し、中尊と脇侍の組み合わせは宗派等によって異なります。



木造太郎天 及 二童子立像



木造太郎天像

この一風変わった三尊像は、どのような存在として造られたのでしょうか？

太郎天像の胎内には、頭部・体部の全面にわたってびっしりと墨書銘が記されており、本像が「屋山太郎惣大行事」と称する神像として1130年（大治5）に、天台僧や宇佐神宮の神職をはじめ100名以上が^{けちえん}結縁し、2月15日から3月18日まで約1ヶ月で造りあげたことが分かります。また、頭頂内部に不動明王を表す種字^{しゅじ}「カーン」や、不動明王に関する墨書もあり、本像が不動明王の化身として祀られていたことを表しています。したがって、二童子像は不動明王の脇侍である^{こんがらどうじ}矜羯羅童子・^{せいた}制多^{かどうじ}迦童子の化身を示しています。こうした造像から、当時の六郷山には独特な山岳信仰・不動信仰があったと思われ、本像が屋山寺及び六郷山全体の守護神として制作されたと考えられます。



二童子像



木造太郎天像の胎内墨書(後頭部内)
昭和46年度保存修理報告書写真より

■種字とは？

仏様を象徴する一文字を梵字（古代インドのサンスクリット文字が起源）であらわしたもの。この一文字からすべての功德が生じると考えられており、植物の種子に例えて「種子」ないしは「種字」と呼びます。



太郎天の胎内墨書
「不動明王(カーン)」

もく ぞう ふ どう みょうおう ざ ぞう 木造不動明王坐像

・文化財指定
【県指定】

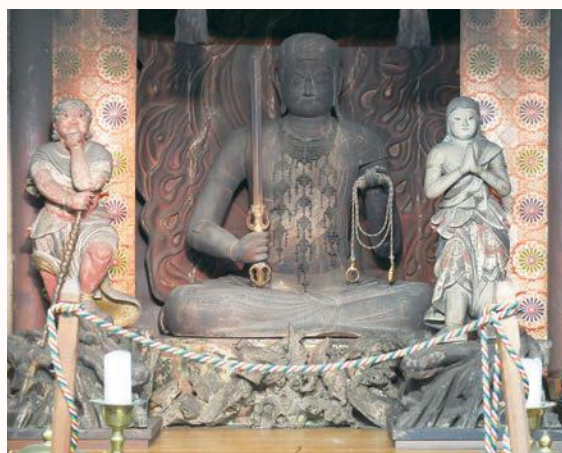
・位置情報
【33°35'10.2"N 131°32'31.1"E】

なかろつち
中黒土にある無動寺には本尊である
木造不動明王坐像をはじめ、薬師如来
坐像・薬師如来坐像（伝弥勒仏）・大日
如来坐像の平安仏4軀が伝わっており、
往時は広大な寺域と多数の末坊を有した
寺院でした。現在の無動寺は江戸時代
後期に移転したもので、元は下黒土の
身濯神社辺りに所在していたとされます。

「黒土不動尊」として知られる本像は像
高115.8cm、^{ひのき} 桧材の一木造で背面に
内割りを施し、背板をはめています。左
目を半眼にして口端に牙を上下に出して
忿怒相を表していますが、どことなく表
情は穏やかにも見えます。幅広く張った
両肩から胸・腹部にかけての肉取りや衣
文表現などは洗練されており、12世紀
前半頃の造立と思われます。なお、本
像は脇侍として矜羯羅童子と制多迦童
子を従えますが、これらは後世の補作
です。

■不動明王の脇侍

中尊が如来でない場合も脇侍がおかれ
る場合があります、不動明王像には一般
的に矜羯羅童子と制多迦童子が配され
ます。矜羯羅は優しく穏やかな子ども、
制多迦は強くて元気の良い子どもの顔
や姿で表されます。不動明王が持つ慈
悲と忿怒の両方の性格を、それぞれに
表現しているとされています。



木造不動明王坐像
脇侍の矜羯羅童子(右)・制多迦童子(左)



木造不動明王坐像
令和2年度の保存修理で長らく失われたままとなっていた左右の持物(左手の羂索、右手の三鈎劍の柄頭)が新補され、本来の形に戻りました。

木造十一面観音菩薩立像

文化財指定
【県指定】

位置情報
【33°33'25.0"N 131°26'33.3"E】

かじやまち こうごんぜんじ
鍛冶屋町の光厳禅寺は、玉津にある
円福寺を創建した絶崖宗卓ぜつがいそうたくが同寺の末
庵として開いた「光厳庵」が後に寺院に
なり、現在に至ります。本像は鎌倉時代
後期の作とみられ、光厳庵創建当初から
本尊として厚い信仰を集めたと考えられま
す。

像高は87.9cm、桧材の寄木造で、
前後に木材を寄せる構造をとります。目は
彫眼ちょうがん。彩色は頭髪や眉、着衣の一部に
確認される他、衣にはきりかね截金が施されてい
るなど細部に凝った造りをしています。左
手には蓮華を入れたけびょう華瓶、右手に数珠を
持つ姿で表されています。優美で均整の
取れた体躯、誇張の無い自然な衣文表
現などは、中央で活躍した仏師の手によ
る制作を感じさせます。保存状態は極め
て良好で、県内の観音菩薩像の中でも特
に優れたものとされており、また国東半島
における鎌倉時代後期の禅宗寺院の展
開を知る上でも貴重な像と言えるでしょう。



木造十一面観音菩薩立像

■十一面観音菩薩とは？

顔の上に10もしくは11の顔を持つ観音さま。優しい顔の「菩薩面」が3つ、怖い顔の「忿怒面」が3つ、牙を上に向けた「狗牙面くがめん」が3つ、大笑いした「大笑面」が1つ、そして頭のでっぺんに如来の顔をした「仏面」が1つあります。たくさんの顔は、多くの人を悟りに導こうとする観音さまが、様々な人に合わせて表情を変えて導いていることを表しています。また、11の顔で八方位に天・地を加えて、「ありとあらゆる所を常に見ている」という意味もあるようです。

もく ぞう だい おう こく し ざ ぞう 木造大応国師坐像

・文化財指定
〔県指定〕

・位置情報
【33°33'35.4"N 131°26'54.4"E】

玉津の円福寺には絶崖宗卓の師であつた開祖・大応国師なんぼじょうみょう（南浦紹明）の像があることで知られています。禅宗では「頂相ちんぞう」といって、写実的な肖像画や彫刻で高僧を表現し、仏さまと同じように大切に扱いました。

南浦紹明は駿河するが（現在の静岡県）に生まれたとされ、幼い頃から仏教に親しみ、15歳で鎌倉・建長寺らんけいどうりゅうの蘭溪道隆に学び、中国に渡りました。帰国後は博多そうふくじの崇福寺の住持を長く務める一方、栄西えいさいとともに日本に茶文化を広めた僧としても知られています。

円福寺に伝わる本像は像高67.7cm（全高109.5cm）、桧材の寄木造で、目には玉眼を入れています。手にほっす弘子をとって椅子に座り、法衣の上から袈裟をまとった姿をしています。張りのある顎や大きめの鼻、軽く引き結んだ唇に禅僧としての威厳が感じられ、写実性に富んだ頂相彫刻の秀作として注目されます。

なお、2011年（平成23）の修理によって像頭部から納入品が取り出され、経典や願文、水晶製の五輪塔形舍利容器しゃりなど多様な納入品の全貌が明らかになりました。また、頭部にあった墨書から本像が1337年（建武4）に造立されたことも判明しました。



木造大応国師坐像



木造大応国師坐像 頭部納入品

おう れき じ せん じゅ かん のんりゅうぞう
応暦寺千手観音立像

・文化財指定
[市指定]

・位置情報
【33°35'34.8"N 131°31'30.2"E】

六郷満山中山本寺の一つである応暦寺の本尊として祀られています。像高153cm、桧材の寄木造で目は玉眼を施しています。両脇手は左右20手にして矧付けとなり、それぞれ各種の持物をもっています。脇手のうち2手がそれぞれ長い錫杖をつけています。やや面長な面貌と伏目の眼差しは上品で、衣文の表現は繊細かつ流麗です。鎌倉時代の造立と思われます。



応暦寺千手観音立像

■千手観音の手の数

(一部の例外を除き)一般的に千手観音像の手は42本しかありません。1本の手が25の世界の人々を救うとされ、40本あれば「 $40 \times 25 = 1000$ 」の世界の人々を救うことになります。これに、元からある2本の手を一緒に数えて42本となります。

れい せん じ じ ぞう ぞん ぞう
霊仙寺地蔵尊像

・文化財指定
[市指定]

・位置情報
【33°37'06.6"N 131°33'21.0"E】

夷谷の霊仙寺境内にある高さ634cmにもなる巨大な石造の地蔵尊像は、1つの石材から彫られており、同様のつくりの石仏の中では九州最大を誇ります。地元の板井派仏師の国良・国政・国吉の合作で、1860年(安政7)に村人総出で立てられたと伝わっています。



霊仙寺地蔵尊像

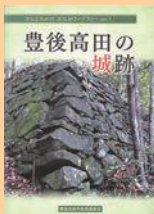
■江戸時代の仏師たち

江戸時代の豊後高田市には、比叡山から法橋位を授かるほどの腕を持った仏師がいました。地元で優れた作品を遺した仏師に夷谷の板井半蔵や板井国光、真玉大岩屋の安藤国恒、真玉城前の土谷定勝らがいます。

■仏像鑑賞の注意事項

- 仏像は貴重な文化財であるとともに信仰の対象です。鑑賞の際にはマナーを守って行動しましょう。
 - 仏像に直接触れるような行為は控え、写真撮影等については各寺院・管理者の意向に従ってください。
 - 本冊子で紹介した中には一般公開されていない仏像も含まれます。各寺院・地区の都合により拝観できない場合もありますので、鑑賞の際には事前に確認するなどの御配慮をお願いします。
- ※本冊子では、各仏像の所在地の【位置情報】を表記しています。場所検索の参考・目安にご利用ください。但し、必ずしも所在地の正確な位置を示すものではありません。

■「ぶんごたかだ文化財ライブラリー」シリーズ バックナンバー



- Vol.1 『豊後高田の城跡』 平成30年度発行
 - Vol.2 『豊後高田の磨崖仏』 令和元年度発行
 - Vol.3 『豊後高田の古墳』 令和2年度発行
- ※バックナンバーは豊後高田市ホームページ内でデータ公開中！
詳しくは



【参考文献】 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 (1994) 『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ』 / 大分県立歴史博物館 (2000) 『大分県立歴史博物館 総合案内』 / 大分県立歴史博物館 (2004) 『壁画再現 - 富貴寺大堂壁画の復元 -』 / 大分県立歴史博物館 (2018) 『大分県仏教美術調査報告 4 内野観音堂木彫仏群』 / 大分県立歴史博物館 (2018) 『聖なる霊場・六郷満山』 戎光祥出版 / 九州国立博物館 (2013) 『木造大応国師坐像 修理報告書』 / 九州国立博物館 (2017) 『六郷満山開山 1300 年記念 大分県国東宇佐 六郷満山展～神と仏と鬼の郷～』 / 九州歴史資料館 (1988) 『九州の寺社シリーズ 9 豊後 くにさき 長安寺』 / 清水眞澄 (2009) 『よくわかる仏像のすべて』 講談社 / 豊後高田市 (1996) 『豊後高田市史 特論編 - くにさきの世界 暮らしと祈りの原風景 -』 / 豊後高田市 (1998) 『豊後高田市史 通史編』 / 豊後高田市 (2013) 『豊後高田市の文化財』 / 西山厚監修・仏像ガール著 (2008) 『感じる・調べる・もっと近づく 仏像の本』 山と溪谷社 / 真玉町誌刊行会 (1978) 『真玉町誌』 / 山本勉著 (2021) 『完本 仏像のひみつ』 朝日出版社 / 渡辺文雄 (1989) 『豊後高田・円福寺大応国師像をめぐって』 『大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 研究紀要 Vol.6』

ぶんごたかだ 文化財ライブラリー vol.4

『豊後高田の仏像十選』

発行：豊後高田市教育委員会文化財室
〒872-1101 豊後高田市中真玉2144番地12
TEL：0978-53-5112 / FAX：0978-53-4731
E-mail：bunkazai@city.bungotakada.lg.jp
発行日：令和3年11月15日発行
印刷：有限会社 宗印刷所
表紙：木造阿弥陀如来坐像(富貴寺・蔵)